

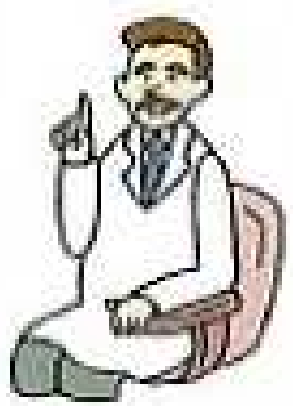


Q：今騒がれているエボラ出血熱について教えてください。

A：エボラ出血熱はエボラウイルスによる全身性感染症で、1976年にスーダン南部で初めて感染が確認され、これまでアフリカにおいて度々集団発生がみられてきました。今回、今年の3月にギニアで発症したのを発端に、現在でも西アフリカ諸国で感染が拡大しており、初めてアフリカ大陸外のスペイン、アメリカでも二次感染が認められ問題となっています。

ウイルスに感染した人や動物の血液・分泌物・吐物・排泄物や、それらの付着した物に

直接接触することで、ウイルスが傷口や粘膜から侵入して感染します。ウイルスの病原性が強く、感染力は非常に強力ですが、空気感染はしません。感染すると2〜21日（通常7日間）の潜伏期の後、突然の発熱・頭痛・倦怠感・筋肉痛などの症状を呈し、嘔吐・下痢・腹痛などの症状が現れます。進行すると歯肉・結膜・鼻腔・皮膚・消化管など、全身から出血



がみられ、致死率は60〜80%と高率です。治療は対症療法のみで、まだワクチンなどの有効な薬剤は確立されていません。

（岡田俊一・おかだ内科クリニック院長、甲府市北口2-9-12、ニッコー北口駅前ビル2F）
TEL055-2888-1801